

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28K02	氏名	前田 堅吾
研究主題 —副主題—	ループリックを活用した課題設定と自己評価が運動有能感に与える影響 —跳び箱運動の学習を通して—		
派遣先	創価大学教職大学院	担当教官	吉川 成司 長島 明純
所属校	八王子市立第十小学校	校長	堀家 千晶

キーワード：ループリック 課題設定 自己評価 運動有能感 跳び箱運動

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

(1) 問題の所在

平成 20 年 (2008) に小学校の学習指導要領が改訂され、平成 24 年 (2012) より完全実施となった。小学校学習指導要領解説体育編には、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことが体育科の目標として掲げられている。小学校段階において、運動への関心や自ら運動する意欲、仲間と仲良く運動すること、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力、運動の技能などの基礎を確実に育成することが重要とされている。(文部科学省, 2008) しかし近年、わが国において、子供の体力低下や運動離れが深刻な問題になっている。

(2) 課題解決に向けて

文部科学省によって実施された「平成 25 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」(文部科学省, 2013) は、これまでの調査結果をもとにして明らかになった、運動する子供としない子供の「二極化」を課題として、「運動が苦手、きらいな子供への取組の充実」「子供の運動やスポーツの主要な場である学校における体育・保健体育の授業での指導の改善」を行っていくための根拠資料を示している。

(3) 運動有能感について

生涯にわたって運動に親しむためには、楽しさ体験を重視し、運動に対して内発的に動機付けられなければならない。内発的動機付けに関わる有能感について岡澤ら (1996) は、体育授業における運動有能感の構造を明らかにしている。運動有能感は、「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」の 3 因子で構成されている。運動有能感の高まりが、生涯にわたって運動に親しむ態度を形成することにつながっていくと考えられる。

そこで、本研究では、小学校の体育授業において運動有能感が低い児童の運動有能感を高める指導法として、自己の能力に応じた課題把握と課題選択を

するための手段であるループリックを作成し、それを活用することで、運動有能感にどのように変化を与えるかについて検討することを目的とした。

2 研究の内容・研究の方法

(1) 研究対象と調査期間

調査対象は、都内の公立小学校第 6 学年 (1 組 36 名、2 組 36 名、3 組 36 名) の 3 クラス、計 108 名である。実験授業及び効果測定を、平成 28 年 9 月 23 日から 10 月 21 日の期間に実施した。

(2) 実験授業

筆者は、第 6 学年担任に依頼し、児童に対して体育の授業「目指せ十小ピックー跳び箱の学習を通してー」を 3 クラス 6 時間協力してもらった。

(3) 有能感を高めるための工夫 (表 1)

表 1 跳び箱運動に関するループリック評価

有能感のレベル	開脚跳び	かかえ込み跳び (閉脚跳び)	台上前転	首はね跳び
5	5 段以上の跳び箱のたてを使って、大きな開脚跳びができる。(大きな開脚跳びステップ⑤)	5 段以上の跳び箱のたてを使って、大きなかかえ込み跳びができる。(油くじピタッと巻地) (かかえ込み跳びステップ⑥)	助走から 5 段以上の跳び箱のたてを使って、大きな台上前転ができる。(足を伸ばして閉る) (首はね跳びステップ⑦)	助走から 5 段以上の跳び箱のたてを使って、大きな首はね跳びができる。(そのある姿勢とやわらかい巻地) (首はね跳びステップ⑧)
4	5 段以上の跳び箱のたてを使って、安定した開脚跳びができる。コサ固ピタッと止まって巻地。	4 段 (3 段) の跳び箱のたてを使って、安定したかかえ込み跳びができる。コサ固ピタッと止まって巻地。	4 段以上の跳び箱のたてを使って、安定した台上前転ができる。フワッと巻地して、コサ固ピタッと止まることができる。(台上前転ステップ⑨)	4 段 (3 段) の跳び箱のたてを使って、安定した首はね跳びができる。(首はね跳びステップ⑩)
3	4 段 (3 段) の跳び箱の巻を使って、開脚跳びができる。(開脚ステップ⑪)	4 段 (3 段) の跳び箱の巻を使って、かかえ込み跳びができる。(スパーマット巻地) (かかえ込み跳びステップ⑫)	4 段 (3 段) の跳び箱の巻を使って、大きな台上前転してフワッと巻地できる。(台上前転ステップ⑬)	大きいボックス (2 台連続跳び箱) の上から首はね下りができる。巻をしっかり入れる。(首はね跳びステップ⑭)
2	板敷のある場で、2 台連続で開脚跳びができる。(開脚跳び箱) (開脚ステップ⑮)	4 段 (3 段) の跳び箱のたてをつかって、うで立て跳び上がり下りができる。(かかえ込み跳びステップ⑯)	舞台の上から前転で、フワッと巻地できる。(台上前転ステップ⑰)	舞台の上から首はね下りができる。手で地面をおす。(首はね跳びステップ⑱)
1	跳び箱に座って、手で置いて跳べる。(開脚ステップ⑲)	跳び箱の上になって跳べる。(かかえ込み跳びステップ⑳)	マットに引いた線のないだてをまっすぐに前転できる。レルマットを 3 枚重ねて前転できる。(台上前転ステップ㉑)	助走から 5 段以上の跳び箱のたてを使って、大きな台上前転ができる。(足を伸ばして閉る) (首はね跳びステップ㉒)

(4) 測定具

運動有能感尺度 (岡澤ら, 1996) を用いて、運動意欲度を測定する質問調査を実験授業前後に実施した。

(5) 統計処理

調査を行った項目の処理は、「IBM SPSS Statistics」の計算プログラムを用いて行った。運動有能感の処理は、全体や各因子の平均算出し、対

応のある t 検定を行った。

### 3 研究の結果

#### (1) 運動有能感の変容

##### ① 運動有能感の平均得点の比較

実験授業前後における運動有能感の平均得点を比較するため、対応のある t 検定を行った。その結果、「統制感」、「受容感」及び「運動有能感」において 0.1%水準で、「身体的有能さの認知」においては 1%水準で有意差が認められ、実験授業前後に平均得点が統計的に有意に上昇した (表 2)。

表 2 運動有能感の平均得点の比較

		N	平均値	標準偏差	t 値
身体的有能さの認知	実験授業前	103	14.10	3.994	2.654**
	実験授業後	103	14.73	4.112	
統制感	実験授業前	103	13.45	3.177	4.37***
	実験授業後	103	14.50	2.838	
受容感	実験授業前	103	14.75	3.715	3.66***
	実験授業後	103	15.64	3.707	
運動有能感	実験授業前	103	42.29	9.515	4.659***
	実験授業後	103	44.86	9.432	

\*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

##### ② 運動有能感上位群・中位群・下位群の運動有能感の平均得点の比較

実験授業前における運動有能感の平均得点を上位群・中位群・下位群に分類し、実験授業が運動有能感の上位群・中位群・下位群それぞれの運動有能感に及ぼす影響を検討した。実験授業前後における運動有能感の平均得点を比較するため、対応のある t 検定を行った。その結果、中位群・下位群においては 1%水準で有意差が認められ、上位群は 10%水準で有意傾向が認められた。特に中位群・下位群で大きく上昇していることから、中位群・下位群にとって相対的に効果があったと考えられる (表 3)。

表 3 運動有能感上位群・中位群・下位群の平均得点の比較

		N	平均値	標準偏差	t 値
上位群	実験授業前	38	51.74	4.391	1.012 †
	実験授業後	38	52.50	4.925	
中位群	実験授業前	31	42.35	1.976	3.310**
	実験授業後	31	45.35	5.395	
下位群	実験授業前	34	31.68	5.988	3.739**
	実験授業後	34	35.88	8.416	

† $p < .10$  \*\* $p < .01$

#### (2) 学習者と教師の自己認知の差

1 クラス (36 名) とその学級担任に実験授業前後で、三つの技それぞれの評価をしてもらい、学習者と教師の自己認知に差があるかを比較した。実験授業前後と認知の差の連関を Fisher の直接確立法によって検定したところ、それぞれに有意な連関は見

られなかった。したがって、実験授業前後の教師と学習者の認知に差があるとはいえない。今回活用したルーブリック表は、各段階の評価基準が具体的であったため、教師と学習者の評価にあまり差が生じず、一致する傾向が見られたのではないかと考えられる。

### 4 研究の考察

本研究では、ルーブリックを活用した課題設定と自己評価が運動有能感にどのような変化を与えるかを、実験授業を通して検証した。その結果、ルーブリックを活用した課題設定と自己評価が、小学生の運動有能感及びそれを構成する「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」の三因子を高めるのに有効な手だての一つであることが示された。特に、中位群・下位群の児童を中心に運動有能感の高まりに影響を与えたと考えられる結果が出た。しかし、ルーブリックを活用した課題設定と自己評価を行う授業が、他の領域や単元においてどのような効果があるか検討を行っていない。そのため、今後、他の学年や領域においても実践し、検討していく必要がある。

### 5 今後の展望

#### (1) 本研究の課題

本研究で用いたルーブリックは、筆者が本研究において作成したものであり、信頼性と妥当性の検討が十分とは言えない。今後、ルーブリック作成の際、現場の教員同士でよく話し合い、児童の実態を踏まえつつ、授業のねらいに即してルーブリックを精練していくことが必要ではないかと考える。

#### (2) 今後の展望

本研究では、運動有能感を高める指導方法として、ルーブリックを活用した課題設定と自己評価の視点から研究を進めてきた。その結果、小学生の運動有能感を高めるのに有効な手だての一つであると考えられることが分かった。今後、ルーブリックのように、多くの運動有能感を高める指導方法の開発によって、子供たちが生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を獲得できるよう、研究を積み重ねていきたい。これからは、本研究で明らかになったことを今後の体育科の授業に発展させていきたい。

